

文理選択の迷いに、 どう向き合う？



会津大学の苧間澤勇人先生に解説していただいている、さまざまな進路指導場面。今回は、文理選択がなかなか決められないでいる生徒とのやりとりです。このようなケースでのありがちなパターンを、一緒に考えていければと思います。先生方は、日頃、どのような声かけをされていますか？

取材・文／清水由佳 イラスト／おおさわゆう



【解説&アドバイス】

会津大学 文化研究センター
教授
苧間澤 勇人先生

かりまざわ・はやと●1986年岩手大学工学部卒業後、岩手県の公立高校教諭に。早稲田大学大学院教育学研究科後期博士課程単位修得退学。教育学、教育カウンセリング心理学を専門とする。2015年4月より現職。

今回のケース

文理選択が迫っているが、なかなか決められない1年生

<ケースの背景・状況>

2年生からの文理選択をそろそろ決める時期になってきているのだが、どちらを希望するか調査票に記入できずにいる生徒。成績は中の上。バスケット部にも入り、学校生活は楽しんでいる様子だが、将来のことが具体的に考えられていないようなので、面談に呼んだ。

ありがちなやりとり

①

教科の得意・
不得意でとりあえず
決めるパターン

先生：文理選択、なかなかできないみたいだけど、どう考えている？

生徒：う～ん、なんかいまいちイメージできなくて。

先生：得意教科は、数学だったよね。

生徒：はあ、まあ。得意というか好きかなあって感じですけど。

先生：だったら、とりあえず理系に進んでおけば。

文系に行ったら「やっぱり理系が」というと

なかなか難しいけど、文転は比較的しやすいから。

【解説&アドバイス】生徒が「自分で決めた」という納得感を大事にしましょう

本来は、文理選択に至るまでに、さまざまな情報収集や自己理解といったプロセスに時間をかけて取り組んでおくべきなのですが、1年秋の決定といった現在のスケジュールではままならないという現実がもちろんあるでしょう。それにしても、この先生は少し一面からのみの結論を急ぎすぎていると言えるでしょう。

教科の好き・嫌い、得意・不得意も、どんなことが好きで、どういう点に興味をもっているのか深めて考えるなど、生徒自身が自

分を振り返られる問いかけが必要です。将来、何かにつまずいたり辛くなったときに、「熟考して自己決定した」という覚悟が、次の選択に大きな意味をもちます。また、熟考することが、学びの意欲や希望につながるという点も大切にしたいところです。まずは、生徒がこれまでの自分を振り返ってみて、どんなことが好きで、何に関心があり、どういうことだとがんばれたのかなど、改めて自分を整理する手助けから始めてもらえればと思います。

ありがちなやりとり

②

大きな目標を 強いるパターン

先生：文理選択、なかなかできないみたいだけど、どう考えている？
生徒：うーん、なんかいまいちイメージできなくて。
先生：将来やりたい仕事はどんなことなんだ？
生徒：やりたい仕事ねえ・・・。
先生：人生には、目標が大事だ。まずは自分が目指すものを見つけないと。
生徒：はあ・・・。
先生：ネットや本などいろいろ見てみて、目標が明確になれば、
文理どちらを選ぶべきかもわかるから。
まずは将来の目標を立ててみよう、な？

(解説&アドバイス) **遠い目標ではなく、今一生懸命になれることが大切です**

将来なりたいたいものから逆算して考えていく、そういう選択の仕方は今やあまり現実的ではなくなっています。特にAIの登場による職業の変化は予想しがたく、従来職業と直結していた学部でさえ確かなことはわからなくなっています。まして、なかなか将来をイメージできずにいる生徒にとっては、文理選択決定の直前に将来の職業を明確にしと言われても、それは難しいことでしょう。

まずは、今、一生懸命取り組めることは何か。小さな目の前の目標を考えてもらうことが大事です。その延長線上に、将来が近づいていく。そんな考え方で、ぜひ相談を進めてもらえればと思います。ネットや本の情報も、その生徒には今は「遠い世界の出来事」です。だからこそ、現実の「今」に目を向けさせていくことが、自分のこととして考える第一歩になると言えます。

ありがちなやりとり

③

価値観を 押し付けるパターン

先生：文理選択、なかなかできないみたいだけど、どう考えている？
生徒：うーん、なんかいまいちイメージできなくて。
先生：そうだな。これからの社会はいろいろと予測がつかないから。でも、まあ有名企業や公務員など、ある程度安定していそうな進路を考えるのは一つだな。
生徒：そのためには、文理どちらに進んだら有利なんですか？
先生：公務員なら法学部とかで法律関連の勉強ができたほうが有利だし、有名企業に入るなら国立や偏差値の高い私学が有利だし。国立に行くなら受験科目を考えると理系に進んでおくほうが有利かもな。
生徒：ふーん、そうなんだあ。じゃあ、国立に行ける自信はないから、法学部とかで公務員狙いで文系かなあ・・・。

(解説&アドバイス) **教え導くのではなく、生徒の価値観を一緒に探りましょう**

この先生の姿勢は、交流分析の「アダルト」が強く出すぎです(※次ページに解説あり)。アダルトは、客観的な意味合いでとらえると、とても大事な機能です。でもそれが強く出すぎると、合理的で冷たい感じがするなどのネガティブな面が出てしまうのです。また、問題は、この先生がもっている情報が少し古いという点です。

社会が大きく変化する中で、職業だけでなく大学や学部の中

身もどんどん新しくなっています。理系・文系どちらの要素ももった「文理融合型」の学部も多くなっていますし、入試に関して単純にどちらが有利、といったことも言えなくなってきました。だからこそ、教師のもっている価値観や情報を伝えるのではなく、共に見つけていく。そんな姿勢で、生徒の考えや気持ちを引き出す「カウンセリング」を心掛けることが大切です。

文理選択できない
生徒への対応のポイント

1. 急がず「振り返り」を大切に
2. 自己決定プロセスを重視する
3. 生徒の価値観を共に探る姿勢で

⇒ こんな面談にできると・・・

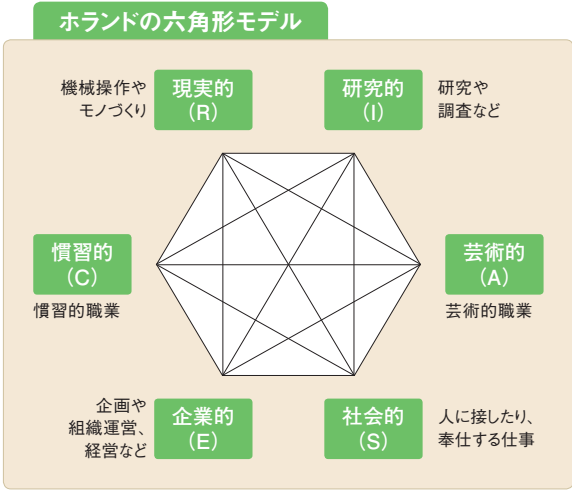
先生：文理選択、なかなかできないみたいだけど、どう考えている？
生徒：うーん、なんかいまいちイメージできなくて。
先生：夏休みに行ったオープンキャンパスではどうだった？
生徒：経済学部で聞いた企業の人と商品開発する話も面白かったし、機械工学のロボット開発の話も面白かったし。
文系も理系も、どちらも面白そうで、決められないんですね・・・。
先生：文系でも、理系でも、それぞれに魅力があったということなんだね。
生徒：そうなんです。中学の頃は、何かモノづくりとかいいなと思って。
先生：モノづくりに興味をもったのは、何かキッカケがあるのかな？
生徒：テレビの商品開発ストーリーとかドキュメントが好きで、わくわくするんですね。文化祭なんかで看板とかお化け屋敷とか、みんなでワイワイ作るのも好きだし。



生徒が、自分で決めて、自分で進んでいけるよう
共に考えていくような問いかけを

オープンクエスチョンで
体験を言語化していく

文理選択での関わり方は、キャリア
カウンセリングを行うことと同じです。
生徒自身が自己理解を深め、同時に
情報収集をする中で、何に気付いて
どう考えていくかを支援していく。そ
の先に、文理選択があります。なので、



面談の中でも、生徒の考えを引き出
し、気付かせて、どうキャリアに結び
付けていけばいいかを共に考えていく
姿勢が大切になります。

そこでの関わり技法としては、オー
プンクエスチョンでの問いかけが基本と
なります。単純に「はい」「いいえ」で答
えられてしまふ質問をクローズドクエ
スチョンというのに対して、オープンク
エスチョンは、本人が自由に話すこと
ができ、考えを深める手助けになりや
すい問いかけです。

例えば、「オープンキャンパスに行って
参考になった？」は、「はい」「いいえ」で
答えられてしまうのでクローズドクエ
スチョン。一方、「オープンキャンパスはど
うだった？」は、自分なりに話を展開
できるのでオープンクエスチョンです。
カウンセリングでは、このオープンクエ
スチョンが基本となります。生徒が自
分自身のことを振り返り、また体験
したことを自分なりの言葉で再整理
するためには、オープンクエスチョンで
問いかけをしてください。

ここでのキーワードは「対話」です。
教師が生徒と同じ目線、同じ歩幅に
なって、伴走するように「対話」する。
ベースを合わせるという意味で、ペーシ
ングと言いますが、そのような姿勢で
問いかけをしていくことで、生徒は徐々
に自分なりの考えや気持ちに気付いて
いくことができます。

ホルランドの職業選択理論から
自己理解を深める支援を

文理選択では、生徒が自己理解や
将来の進路の方向性の考えを深めて
いくことが事前準備として不可欠で
す。その際、ベースとなる理論として
重要なものの一つに、ホルランドの職業
選択理論があります。世の中に普及
している適性検査などの多くはこの理
論を基に作られていて、その主な分類
(ホルランドの六角形モデル)は別表にあ
る通りです。

ホルランドはアメリカの心理学者で、
「個人がある事柄を好きになったり、
嫌ったり、あるいは興味をもったりも
たなかったりする」ことは、その人の生
活歴と深く関係している」という考え
方から、環境との相互作用によるキャ
リア行動の発達を唱えました。そのた
め、この理論を踏まえて生徒の話を

聞いていると、生徒が今現在熱中して
いることと職業領域との関連が推測し
やすくなります。また、適性検査を
基に、今までにどんな場面でその力
を発揮できていたかなど、自己理解
を深めるために役立てることも可能で
す。例えば前ページの1年生の場合、
モノづくりに興味があるキッカケとして

「みんなでワイワイ作る」という言葉が
あります。そうすると、単にモノづく
りや機械系に直結しやすい「研究的
(I)」や「現実的(R)」よりも、「社会的
(S)」への志向が強いのではないかと
いう推測もできるわけです。

これらの知識をしっかりと得ると、適
性検査なども上手に活用して、生徒
の自己理解を深める支援につなげるこ
とが可能になるでしょう。

>> 交流分析とは

アメリカの精神科医バーンが理論化した、人格構造
や対人関係でのやりとりの型を基にした心理療法。
自我の中に「親(ペアレツ)」「大人(アダルト)」「
子ども(チャイルド)」の3つの型を提唱しており、そ
の型の違いなどから対人関係の課題があることなど
を分析する。「親」は自分の親がしていたような態度・
考え方、「子ども」は自分が子どもの頃に体験したよ
うに感じ、振る舞うこと。「大人」は、その時々で適
応的な態度や振る舞いをとる姿勢や考え方。対人場
面の中で、どの自我が表れるかによって、コミュニケ
ーションがスムーズになったり、行き違いが生じ生き
づらさにつながるなど課題が生じると考えられている。